



# RUNNER



<b>目次</b>	
新人ボランティアはこうして生まれた.....	2
今日のRUNNER.....	4
活動の現場から	
夏休みアメリカ滞在体験談.....	7
樹洞にくらす生きもの.....	10
動物フェスティバル、あつぎ環境フェア.....	11
ジャパンバードフェスティバル 2009.....	12
ボランティア雑感.....	13
RUNNER 通りの住人たち.....	14
旅日記 ツシマヤマネコ.....	16
インフォメーション.....	18

# 新人ボランティアはこうして生まれた！！

## ボランティアへの道のり

神奈川県自然環境保全センターの野生動物救護ボランティアに登録して活動するためには、毎年5月か6月に行われる講習会に参加することから始まります。この講習会は、2日間にわたって、救護活動の実際や救護の方法など、ボランティアに携わる上で必要な知識を身につけるために行われます。

次に、8月の終わりまでに最低3日間の自主研修を積みなければなりません。実際に動物たちの世話をすることで、救護活動への知識を深めるとともに、救護の方法を身につけることがねらいです。

ボランティアの種類には

- ① 長期飼養ボランティア：野生復帰できない個体を一生預かる
- ② 短期飼養ボランティア：①以外の個体（主にヒナなど）を1カ月ぐらい預かる
- ③ 一般ボランティア

がありますが、必ず上記の2日間の講習会と3日間の研修を受けていただいています。この2つを経ると修了式で登録ボランティアとなります。ここでは、このうちの2日間の研修期間にスポットを当ててご紹介します。

※以下は保全センターのボランティア室に置いてあるボランティアさんの活動の記録「ボランティア日誌」を参考にしています。

## 研修1日目

9時—白衣を着て、靴を長靴に履き替え、ゴム手袋をし、マスクをしたら準備完了。研修1日目ということで、少し緊張している。

はじめに、本館A室のタヌキ部屋の掃除をすることになった。

カイセン症にかかったタヌキケージの掃除には注意が必要とのこと。カイセンタヌキの食器やトレイから他の動物たちへダニがうつらないよ

うにするため、洗う前に熱湯消毒しなければならない。手袋を使いまわさないことも重要だ。

掃除を終えると、職員さんが用意した餌をタヌキに与える。おとなしい個体は問題ないが、気性の激しい個体に与える時は噛まれるのではないかと緊張した。

水を入れた食器を何故かひっくり返す個体があった。もう一度入れ直す。またひっくり返す。もう一度…またひっくり返す…きりが無い。ひっくり返せないような入れ物があるといいのに…などと思っていたら、ゲージの下にある鍵をかけたまま忘れてしまったらしい。そのケージから1頭脱走してしまったが、部屋の隅でうずくまっていたのを発見した。この個体は脱走の前科が5犯程あるようだ。事なきを得てよかったが、今後気をつけるようにしたい。



本館A室タヌキ小屋

餌を入れると、みんなすぐに食べ始めたが、1頭だけ口をつけようとしめない。気になって職員さんに聞いてみると、その個体はすぐに食べ始めはしないがいつもちゃんと完食しているとのこと。

威嚇してくる個体もいれば、逆に興味を持って触ってくる個体（セクハラ君と呼ばれているらしい）もいる。餌をすぐに食べ始める個体もいれば、「とっておく」個体もいる。タヌキにも個性があつておもしろい。

## 研修2日目

今回は別館の鳥部屋の掃除をすることになった。鳥部屋に入るとその鳥の種類の多さにまず驚いた。職員さんによると、年間60~70種類、6月の段階でも20数種いるらしい。

新聞紙や水の交換、トレイを洗うなどの掃除を済ましたらいよいよメインイベント(?)ヒナへの差し餌である。餌を近づけるだけで食べてくれる個体はいいとして、自分から餌を食べることができない個体への強制給餌は難しい。どの程度の力で握り、どの程度の力で嘴を開けばいいのか、ピンセットでどの程度餌を押し込めばいいのか、ちゃんと「そのう」に入っているか、詰まらせていないだろうか…初めてのことで、おっかなびっくりやっているとどうしても時間がかかってしまう。小鳥たちにストレスを与えてしまったかもしれない。なんだか申し訳なかった。

また、差し餌をするにも、鳥やその成長段階によって、与えていい餌とそうではない餌があるので、餌を間違えないようにすることにも気をつけなければならない。

(こうして四苦八苦しながら餌を与え、2時間後再び差し餌をしようと思ったら、1匹のツバメのヒナが死んでいた。保護されてくるくらいだから、もともとの生命力が弱かったのかもしれない。「生」の厳しさを初めて目の当たりにした瞬間だった。)



ヒナたち

## 研修3日目

今回は外の小屋の掃除をすることになった。トビやオオタカなど猛禽のケージに入るのは

鳥たちが襲ってくる様な気がして少し怖い。威嚇してくる個体もいる。しかし、鳥たちにとっては人間の方こそ怖いのだそうだ。わかってはいても、怖い。



トビ小屋

あるコサギと、あるアオサギの餌に対する勢いはすさまじい。案外怖い。勢い余って他の鳥の餌まで食べてしまったので、これからは餌のやり方に気をつけなければと思った。

そして、仔タヌキのゲージへ。今年は合計で7頭保護されてきたが、これは大変珍しいことだそうだ。そのうちの2頭は元気いっぱい走り回り、餌もよく食べる。散歩にも連れて行って、かわいいことこの上なし。でも、こんなに人間に馴れてしまって、放野できるのだろうか?

この2頭のタヌキはかなり小さい頃に保護されてきたため、人間が授乳して育ててきた。だからどうしても馴れてしまうことがあるのかもしれない。現在は大きくなって、外の広いゲージに移されたことだし、だんだん野生を取り戻してくれることを願う。

## 3日間を終えて

差し餌は毎回やっていたので、かなりスムーズにできるようになった。そのうが一杯になった感じがわかったような気がする。また、ツバメよりもスズメやシジュウカラの方が嘴を思うようにあけてくれず、差し餌がより難しいことを知った。

最初はわからないことだらけだったけれど、先輩ボランティアさんや職員さんが丁寧に教えてくれてとても嬉しかった。



# 今日のRUNNER



第六走者：タヌキ

ここでは保全センターに運び込まれた傷病鳥獣について保護記録やエピソードを交えてご紹介します。

## 身近な哺乳類

「けものへん」に「さと」と書いて狸（タヌキ）。漢字から、タヌキは昔から私たちの身近に生息するお馴染みの動物だったことがうかがえます。それは都市化が進んだ現在も変わってはいません。私たち人間のすぐそばで、例えば道路の脇の側溝などを生活場所として上手に利用しています。

この数年、タヌキは保全センターに年間50～60頭も保護されてきます。今回は私たちの身近で暮らしているが故に起こった、仔タヌキ2頭のとある事件を紹介します。



2009年5月21日 まだ目があいて間もない

## 保護個体データ

受付番号：090151（一号）

090245（二号）

種類：タヌキ（幼獣、♀）

保護年月日：（一号）2009年5月15日

（二号）2009年6月9日

保護場所：神奈川県内

状態：普通

転帰：2009年10月21日野生復帰

## ある日の町での出来事

「側溝でミィミィ鳴き声がするから助けて」消防署にかかってきた1本の電話。消防士は通報を受け、側溝の中から4頭のまだ目も開いてない真っ黒い幼獣を取り出しました。タヌキの幼獣です。こうして保護された4頭、その中の1頭が仔タヌキ一号でした。保全センターに運ばれましたがすぐに元の場所に戻されました。

理由はただ一つ。誤認保護だったからです。誤認保護とは、本当は保護する必要がないのに人間が誤って保護してしまうことを指します。

この仔タヌキたちの親も、たぶん側溝で子育てをしていたのでしょう。当時親がいなかったのは人間に驚いて逃げてしまったと考えられます。

## ひとり残され

こうして保護場所に戻され、親の元に帰り一件落着くはずでしたが…。再び保護してしまった人がいたのです。元の場所に戻すとき、地域の方々に保護する必要がない、ということを説明してもらったのですが、放っておけないと思う人がいたのでしょう。しかし4頭は適切な世話が受けられずに衰弱し、5月19日に再び保全センターへやって来ました。保全センターでは4頭の状況からやむなく受け付けることにしましたが、すでに4頭とも脱水症状がひどく3頭は次々と死亡してしまい、一番体の小さかった彼女だけが生き残りました。



2009年6月4日  
毛に白が混じってきた

## べたべたの仔

6月9日には仔タヌキ二号が保護されました。彼女は人間が仕掛けた粘着シートに引っかかり、べたべたの状態で見つかりました。体に負担がかからぬよう慎重に洗浄などが繰り返され、数日かけてようやく元の状態に戻すことができました。彼女も4頭姉妹でしたが他の3頭は助かりませんでした。つまり、人間のせいであわせて6頭もの仔タヌキの命が失われてしまったのです。

2頭は姉妹のように一緒に育てられました。はじめはミルクしか飲めませんでした。次第に離乳食も食べられるようになり、6月19日には保全センター別館のケージに2頭そろって入居しました。体重は来たときの3倍以上になり、真っ黒だった毛も少しずつ白い毛が混じり、タヌキらしい色に変わってきました。そしてその頃から別館内に放して歩かせるリハビリを行いました。



2009年6月9日 べたべたの状態

## 外の世界

室内で歩くのにも走るのにもすっかり慣れたので、ボランティアの監視の下、少しずつ外を自由に歩かせることにしました。初めは別館入り口の近くを2頭そろって移動するだけでしたが、徐々に行動範囲を広げバラバラに行動するようになりました。

ちなみに普通はケージから出してリハビリをすることはめったにありません。彼女たちは呼べば戻ってくるので、このやり方でリハビリをしました。

保全センターにやってきてから約5ヶ月が経つ頃…。季節は秋、野生のタヌキ達のひとり立ちの時期です。彼女達のリハビリは順調に進んでいました。2頭でじゃれあい、時には本気のケンカに発展して傷を作ることもありましたが、そうすることでタヌキの社会性を身につけていったようです。

人間にとっても馴れていて、無事に野生復帰ができるのか心配でした。しかし外で過ごす日々を重ねるうちに人間よりも外の自然に興味を示すようになり、そのうち地面を鼻先で掘ってミミズを捕り食べる様子も見られるようになりました。少しずつ野生の血が呼び覚まされてきたようです。

そして10月21日、2頭で野外施設に消えていきました。その後二号はその夜を境に全く姿を見かけなくなり、一号も数日の間見かけただけで完全に野生復帰を果たしました。

## 人の手で育てるということ

まだ目の開かない幼獣を育てるのは、いくつもの問題点があります。まずあげられるのは、完全に人に馴れてしまうということです。今回の仔タヌキたちも職員やボランティアに近づき、じゃれついてくるので、野生に帰れるか心配になるほどでした。タヌキに限らず、他の哺乳類の幼獣でも同様に起こり得ます。

他にも、無事に野生で生きられるかというのがあげられます。幼獣の頃は親から様々なことを学んで吸収する時期です。その頃から人間に育てられると野生の世界を知り学ぶことができません。一番学習できる機会を奪われてしまうのです。

人間は体を大きくすることはできますが、自然界で生きる力を身につけさせることはできません。その力がなければ、野生に帰っても生きることができません。



2009年6月26日 人懐っこい

○ 図鑑 ○ NO.6

・タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

食肉目イヌ科

東アジアに自然分布し、日本では本州・四国・九州のホンダタヌキと北海道のエゾタヌキに分けられる。郊外の雑木林から山地の森林まで広く生息する。夜行性。

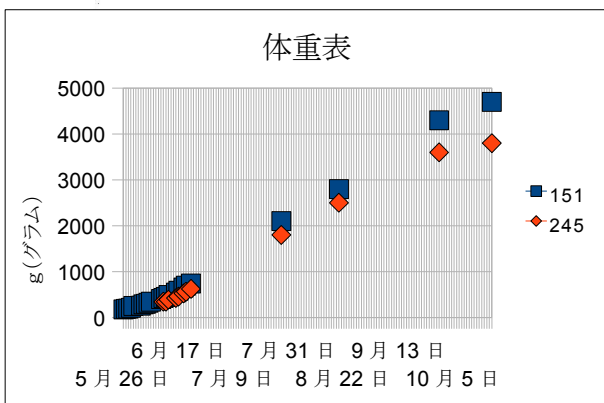
雑食性で果実、ドングリ、穀物や昆虫など様々なものを捕食する。パンやゴミ捨て場の残飯なども食べる。

ため糞と呼ばれる複数のタヌキによる共同トイレの利用がある。

一夫一妻制で子育てを行う。春に子供を生む。生後およそ30～50日で子タヌキは親について動き回るようになり、1ヶ月ほど親と行動を共にするが、徐々に離れて採食するようになる。

都市では側溝や雨水管などを移動経路やねぐらに利用している。

\*参考：・小宮輝之『フィールドベスト図鑑 12 日本の哺乳類』（株式会社 学習研究社、2003）  
・高槻成紀、山極寿一『日本の哺乳類学②』（財団法人 東京大学出版会、2008）



大切に育てています。でも常に親は子供のそばに  
いるわけではなく、親が食べ物を探しに行ったり  
していて、たまに子供だけになっていることがあ  
ります。つまり、野生動物が子供だけにいるから  
保護が必要というわけではありません。まずはそ  
の動物の様子を観察してください。

保護はあくまでも最後の手段です。野生動物は自  
然界で生きるのが幸せなこと。もし彼らが困って  
いるようなら、できるだけ自然界から引き離さな  
い方法を考えてみてください。また、どうすれば  
よいのか、保護すべきかどうか判断に迷う場合は  
保全センターの野生生物課（046-248-6682）に相  
談してください。

誤認保護をなくすために

人間の誤った判断のせいで、親と引き離されて  
しまった野生動物たちはまだまだ沢山います。

特に野鳥では春、巣立ったばかりのヒナを迷子  
だと勘違いして保護される方がよくいます。また  
哺乳類でも、今回のように親と引き離してしまっ  
た例が毎年必ず起きています。そういった誤認保  
護は、野鳥と哺乳類共に年間保護件数の約5%を占  
めています。

野生動物も人間と同じく、自分の子供をととも

私達のような  
仔を増やさな  
いでください



2009年9月9日 外での一コマ

## 活動の現場から

このコーナーでは普及啓発活動などに参加したボランティアさんが  
その体験をもとにレポートしてくれています。

### ◆夏休みアメリカ滞在体験談◆

私は今年の夏休みにミネソタ州にある2つの野生動物救護施設に行き、アメリカの野生動物救護の実態をこの目で見てきました。

21年度ボランティア講習会受講生の修了式があった10月4日の午前中に、「ハクトウ鷲に会えた！ーアメリカの野生動物救護現場から」と題して発表を行いました。

#### ☆The Raptor Center College of Veterinary Medicine (TRC) ☆



左: ハクトウワシ(幼鳥)

中央: アカカタノスリ

右: ハクトウワシ(成鳥)

TRCはミネソタ大学獣医学科に属する施設で、猛禽類を専門的に救護しています。ミネソタ州で保護される猛禽類はもちろん、ノースウェスト航空により無償で全米から傷ついた猛禽類たちが年間700羽前後運ばれてくるそうです。

ボランティアは応募多数のため、300人と定員を決められていて、給餌、保定、環境教育、グッズ販売など、様々な係に分担されて毎日TRCで作業を行っています。

私は主に診療を見学し、手伝いもしてきました。診療室には麻酔やレントゲン室、ICU、手術室など充実した設備があり、ここで1日に約30羽の猛禽類たちが診察を受けます。鉛中毒のハクトウワシ、衝突が疑われるヒメコンドル、誤認保護のヒガシアメリカオオコノハズクなど、リハビリ室からボランティアさんが様々な猛禽類を持ってきて、大学のドクターや研修生たちが診ていました。初診時の一般検査や、日常的に行っているレントゲン、強制給餌、リハビリなども体験しました。また、左上腕骨を骨折したカタアカノスリの手術にも立ち会わせてもらえました。

アメリカは道路が広くて車をかなり飛ばすので、このような衝突や交通事故が増えるのかなあと思いました。

治療中の個体や安静が必要と判断された個体は、暗い部屋にある特注のケージで管理されます。その後、回復すると外のフライングケージに移され、リハビリをして放野へと向かいます。

設備や人手の問題などで、全てを日本でも実行しようとする中々大変なところがありますが、尾羽のガードや腫瘍症の治療など、少しでも自分にできることがあるかもしれないと思っています。

### ☆Wildlife Rehabilitation Center of Minnesota (WRC) ☆



(左から)アカミガメ、ハイロリス、アメリカササゴイ

WRC はミネソタ州にある民間の野生動物救護施設で、ミネソタ州のあらゆる爬虫類、哺乳類、猛禽類以外の鳥類を取り扱っています。年間約 8000 個体が WRC に運ばれてきます(カモ類だけでひと夏で 300 羽!!)。

私が行った時はちょうどヒナや幼獣の多い季節だったため、保全センターで身につけたさし餌の技術が役に立ちました。

アメリカに来て最初に驚いたことは、野生のリスの多さです。ハイロリスはとても人間に近い環境でも生息していて、民家の庭にある木に目の粗い巣をつくるため、よく巣ごと落ちて幼獣が保護されてくるそうです。保護される幼獣の中には親に世話をしてもらえなかったのか、何百ものハエの卵を産みつけられている個体もありました。

鳥たちも日本で見られないような鮮やかな色をした鳥が多かったです。

ただ、アメリカでは狂犬病が流行しているため、ワクチン未接種の私はアライグマなど哺乳類の成獣には会わせてもらえませんでした。

人間の目があると症状を見せない野生動物たちに対しては、何も無い部屋に動物を放して監視カメラで様子を見ることもしていました。

### ☆一番考えさせられたこと☆

みなさんは安楽死というと、どのようなイメージを持っているのでしょうか？

私は今回初めて海外の野生動物救護の現場に立ち会い、いろいろ考えさせられたことがありました。その中でもこの安楽死というのはとても難しい問題だと思います。

アメリカでは放野不可能と判断された野生動物はほとんど安楽殺されます。ミネソタでは長期



里子という枠はなく、短期里子でも 30 日以内と限られています。

現在の日本では安楽殺については施設によって対処法はまちまちです。

自由な世界から一転して、一生ケージの中で暮らしていくことになってしまっても餌を食べ続ける動物たち。このほとんどが人により傷つけられた子たちです。

言葉をしゃべれない動物たちの考えが 100%分かる人なんてこの世にいない訳ですし、安楽死が正しいとか誤っているとか、これからもずっと答えは出ないかもしれません。私の中にもまだ結論は出ていません。

ただ、みなさんにも少しでも良いので、人間によって傷つけられた野生動物たちの安楽死について考えてほしいのです。

### ☆来聴者の感想☆



- ・アメリカの野生動物保護の規模は大きくボランティアの活動も多くうかがえると感じました。猛禽類の大きさにも驚かされました。ケージはスポンジで保護されていて細心の注意が行き届いていると感じました。
- ・アメリカも日本と同じ鉛中毒や狂犬病などの問題があることがわかりました。考え方の違い～日本、アメリカ共にどちらが正しくて間違っているというわけではないので難しいと思いました。
- ・海外の救護現場を知ることのできる良い機会となりました。英語という壁がなければ海外へ旅立ってみたいと感じました。
- ・ボランティアの活動の幅が広いことが印象的でした。

・アメリカの施設の充実ぶりと支えるボランティア(民間団体)の強さに驚きました。各々の種にストレスを加えないような配慮の仕方は参考になりました。

・ラプターセンターの話であった尾羽ガードは、実際に保全センターでもできそうだったので、自分もやってみたら良いのではないかと思いました。

・アメリカでの救護に対する姿勢というものが、日本と比べて違うことがあったので「流石アメリカ」と思いました。一番印象的なのが、スライドにでてきた動物が生き生きしているというか、自然が身近にあることが当たり前であったことで、すごく羨ましかったです。



## ◆研修会『樹洞にくらす生きもの』◆

平成21年10月4日(日)の研修会では、県立生命の星・地球博物館の広谷浩子先生に『樹洞にくらす生きもの』について話を伺いました。広谷先生はその他に、平成21年7月18日(土)～11月8日(日)まで県立生命の星・地球博物館で開催されていた企画展についても話してくださいました。

はじめは樹洞とは何なのか?という話でした。樹洞のでき方については主に、①台風などで木が傷ついて腐敗してできる②キツツキがあけてできる、の二パターンがあるということでした。②では時間がたつと木がふさいでしまうこともあるそうで、木の生命力に驚かされました。また、木は樹皮のすぐ内側が活着している部分なので、内部に穴ができて木はそれほど困らないそうです。こうして幹の内部の材が腐ると、入り口は小さいが内部が広い洞ができ、生きものの格好のすみかになります。



次に樹洞にくらす生きものを紹介してくださいました。保全センターでも保護されるムササビやフクロウの他、アカゲラなどのキツツキ類があげられました。特に、オオチャイロハナムグリなどの特定の昆虫類も樹洞がないと生きていけないということを知って、樹洞の大切さを改めて感じました。

企画展については3～4年前から準備や研究をすると聞いて、博物館の仕事の大変さを知りました。準備中の話や、本物の樹洞のある木を搬入したことでの苦労話など、普段博物館に行っても知りえなかった話を伺い、非常に興味深かったです。展示方法も穴をのぞいたら剥製が見えるよ



うにしたり、懐中電灯を使って実際に樹洞の中をのぞきこめたり、ぬりえやクイズなど、ハンズオン展示(実際に触れて体験してもらう)の工夫をして楽しんで学んでもらうようにしてあるそうです。

この研修会の後、私は個人的に実際に企画展を見に行きました。子供は剥製やぬりえに夢中になり、大人は説明をじっくり読むなど人それぞれに楽しんでいました。そして、ムササビ体験コーナーというものがあり、ムササビの飛行を体験してみようということでした。体験者はムササビの着ぐるみを着て、画面の前に腹ばいになって風を受けます。うまくいけば一瞬だけムササビになって飛び立つことができます。

今回話を聞いて、自然の中で息づく樹洞や博物館の役割を再発見できました。もし散歩中に木を見つけたらみなさんも樹洞を探してみませんか。

## ◆「動物フェスティバル・神奈川 2009 in ふじさわ」◆

10月12日（月）に「動物フェスティバル・神奈川2009 in ふじさわ」が藤沢市民会館において開催されました。野生動物救護の会（以下、当会）は神奈川県における野生動物の救護状況をパネル展示しました特に動物フェスティバルということで、「ネコによる野鳥の被害」の多さを訴え、ネコの室内飼いの大切さを話しました。また、会場では、藤沢メダカの学校を作る会の活動紹介、災害救助犬・介助犬・聴導犬のデモンストレーション、犬のしつけ教室、卵のつかみ取り大会など様々な動物に関するイベントがありました。特別講演として、新江ノ島水族館の職員さんによる「えのすいのイルカのはなし」や保全センターの加藤千晴獣医師による「傷つく野生動物からのメッセージ」も開催され、大変にぎわいました。

## ◆「2009 あつぎ環境フェア～未来に残そう厚木の自然～」◆

11月1日（日）に「2009 あつぎ環境フェア～未来に残そう厚木の自然～」が厚木中央公園にて開催され、当会も参加出展しました。家族連れなど約1万4千人が来場し、大変にぎわいました。会場では、各種エコ製品の展示や体験教室、花の種・堆肥の無料配布やリサイクル品の販売などが催されました。また、会場近くではあつぎエコ特別大使の榊原郁恵さんを迎え、環境フォーラムが催されました。生活にとっても身近な環境問題に関するフェスティバルだったので、ジャパンバードフェスティバルや動物フェスティバルとは全く違った雰囲気でした。



衝突について説明するボランティア

当会では「衝突（バードストライク）による被害」をメインテーマに、衝突で亡くなったオオタカの剥製や衝突現場の写真を展示しました。また、衝突が原因で保護され、現在は当会ボランティアに飼育されているツツドリのルンちゃんも参加してくれました。野生復帰が不可能なためエディケーションバードとして色々なイベントで活躍してくれているルンちゃんを目の当たりにして、今まで野生動物救護や野鳥に興味がありませんでした人にも関心を持っていただけた様



救護の会の展示の様子

です。恒例の「野鳥の親子当てクイズ」も行い、子供たちに大好評でした。今回は環境に重点をおいたフェアで、動物や鳥がメインテーマのイベントではなかったのですが、野鳥に全く感心が無かった一般の人へ普及するとてもよい機会だったと思います。

また、自分自身も環境問題や介助犬など様々な分野に関する情報やそこで活動する団体について知ることができました。

## ◆ジャパンバードフェスティバル 2009◆

2009年11月7日(土)、8日(日)に千葉県我孫子市で「ジャパンバードフェスティバル 2009」が開催されました。毎年11月頃に行われる「人と鳥の共存をめざして」をテーマにした大きなイベントで昨年、一昨年は雨の中での開催でしたが、今年は2日間とも晴天に恵まれた本番を迎えることができました。

当会も毎年参加しており、今年で4年目になります。

今年、私たちは救護原因の一つである「衝突」をメインテーマにしたブースを出展しました。「衝突」とは、周りの景色が映りこんだ窓ガラスなどを、野鳥が誤認してぶつかってしまう事故です。センターにも毎年、衝突事故によって多くの野鳥が保護されてきており、保護原因として年々増えてきています。

当会のブースでは、衝突の実態をより多くの方々に理解していただこうと、窓ガラスにぶつかった鳥の痕跡の写真や衝突によって保護されたトビの写真などを展示しました。また、窓ガラスの模型と衝突によって死亡したオオタカの剥製を展示し、衝突事故の様子をより立体的にとらえられるようにしました。

そして、衝突事故の実態や防止対策の詳細を載せた資料も配布しました。



オオタカの剥製と窓ガラスの立体模型



窓ガラスにぶつかったハトの衝突痕

ブースの中で注目されていたのがボランティアに長期飼育されているツツドリの「ルンパ」愛称「ルンちゃん」。ルンちゃんは窓ガラスに衝突して保護されました。頭を強く打ったため、方向感覚に障害をきたしうまく立っていることが難しい状態で野生に戻すことができません。

私たちはオオタカの衝突の立体模型やルンちゃんを通して、衝突事故が身近に起きていて、それによって傷ついている野鳥がたくさんいるということを伝えました。

ジャパンバードフェスティバルは毎年行われるイベントで、日本最大の野鳥のお祭りです。野鳥に興味のある方、動物が好きな方、自然が好きな方、是非来年は参加してみてくださいね。



ブースの様子

# ボランティア雑感

このコーナーではボランティア歴1年目の平さんが日々の活動を通して感じたことを紹介します。



## ～ムササビとの暮らし～

9月26日夜、家に帰るとムササビが待っていた。林の中に仕事場を持っている夫の仕事仲間から

「得体の知れない生き物が顔を血だらけにして鳴いている」

との電話があり、話からムササビらしいと解り、我が家に持ってこさせたという訳である。

保全センターで受付し、短期ボランティアとして家で育てることになった。

体重160gまだ眼は開いていない。段ボール箱に住まいを作って暮らしてもらったこととした。家には犬と猫がいる。夜中のミルク時には、夜遊びをしていた猫の相手をし、物音を聞きつけた犬が、自分も膝に抱いて欲しと寝室から出てくる。3匹の相手をして、また布団にもぐり込む日々が何日か続いた。

3日後に眼が開きムササビらしくなった。

7日後には自分の体の手入れをしている。針状軟骨のある皮膜をひろげて、ていねいに舐めてから、体を丸めて眠りにつく。起こすと大あくびをして手足を伸ばす。また段ボールのなかで一人運動会を繰り返している。

そのうち尾を頭の上の持っていき、10月19日初めて膜を広げて70cmほど飛んだ。最初のうちは、準備をして身構え、ようやく飛んでいたのが、だんだんと上手になり、今ではカウンターテーブルから人の肩に、猫タワーの上段から出窓にと、あっという間に移動できるようになった。

しかしムササビがこんなにも遊び好きとは思わなかった。

キツネの仔みたいに四肢を使って上に飛び跳ね、腹を見せて人の指に絡まってくる。腹をなでると猫キックならぬムササビキックを繰り返し、やめると期待をこめた眼(?)で催促する。戸が開くと急いで廊下や階段に出ようと走り、引き出しの中には、もぐり込もうと、身を乗り出して覗き込む。抑えようとすると、体を上下左右自在にひねり、まるで軟体動物のようである。



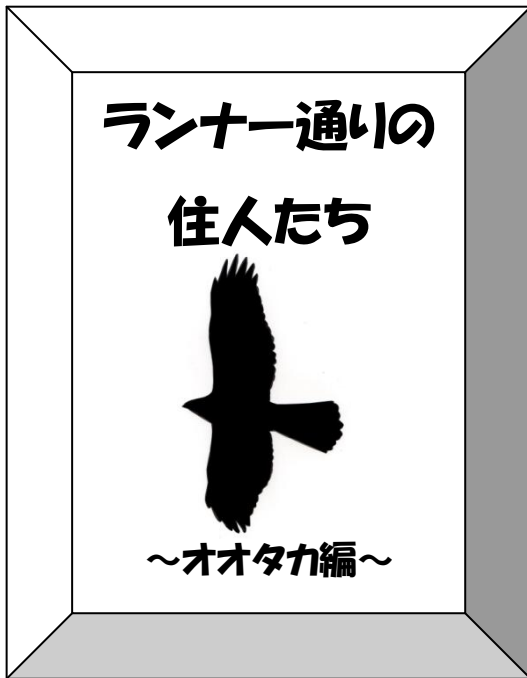
預かってすぐから軟便となり1ヶ月ほど続いた。ミルクを変えたりして対応には苦労したが、体重は600gを超え、尻尾の長さは30cmとなった。

11月13日保全センターのボランティアを行った時には、一緒に連れて行った。ムササビケージの中には、すでに8月に保護された先輩ムササビ1匹と11月に保護された後輩ムササビ2匹が入っている。中に放し、しばらくしてから見に行くと、4匹がムササビ団子となっている。

夜、家に帰ると、保全センターで後輩ムササビからミカンの食べ方を教えてもらったようで、さっそく食べていた。



～つづく～



大鷹

Goshawk

*Accipiter gentilis*

タカ目タカ科ハイタカ属

### オオタカってどんなヤツ?

オオタカといえばでかい。ってイメージが強い方…実はこいつ、そんなにでかくないのかも??

オオタカは中型の猛禽類で、全長約 50~60cm、メスの方がオスよりも大きいです。

日本には主に北海道と本州を中心に生息していますが、世界的にはユーラシア大陸・北アメリカ大陸と広く分布しています。

オオタカというこの名前、背中の色が青灰色っぽいのでアオタカ(蒼鷹)と呼ばれていたのが、いつの間にかオオタカになったそうです。

生態系ピラミッドの頂点に君臨するオオタカは、国の指定で絶滅危惧種Ⅱ類としてされていますが、最近では意外と街中でも見ることができます。

そんなオオタカは木に止まって待ち伏せをする狩りもしますが、自分も溺れるんじゃないかと思うくらい大胆にカモを水面下に引きずりこんだり、建物を使って獲物を追いこむなど、とってもユニークな狩りもします。

アカマツなどの針葉樹に直径約1mというとても大きな巣を作り、早春~初夏に卵を1~4個産んでペアで子育てを行います。

### オオタカ夫婦



(左) 受付 NO. 050374 (♂)

受付日: 2005年7月16日

保護場所: 座間市

牧場で立ちすくんでいたところを保護される。左眼閉眼・左翼肘関節骨折のため、衝突が疑われる。

(右) 受付 NO. 040681 (♀)

受付日: 2004年11月5日

保護場所: 箱根町

翼の骨折と出血が顕著に見られた。

このオオタカたちは保護日や保護場所は全く違いますが、保全センターのフライングケージ(FC4)に仲良く暮らしていました。オオタカは特に神経質なイメージが強いですが、こいつらは長年人に飼育されているせいか、ピッピッと警戒音を発しながらも食事中は絶対に手(足?)を休めることはしないで餌を翼で覆って隠しながらも食べ続けていました。

当会ではこの2羽でオオタカハネムーンプロジェクトと題し、新鮮な杉の枝を持って来るなど繁殖を試みたのですが、結局うまくはいきませんでした。

♂の方は残念ながら、寒さが増した今年の11月22日に他界してしまいました。

### 足なしオオタカ

受付 NO. 070557

受付日: 2007年11月7日

保護場所: 小田原市



070557 とその足

この子はチャボ小屋に侵入し、チャボをまるまる一羽まるまる食べ終わって満足感に浸っていた時に発見されました。受付時には左足に異常があり、段々と腫れてきて結局治療の甲斐もなく、壊死して第1～3指がなくなっていました。それでもとっても食欲旺盛で、職員さんたちが細かく切ってくれた肉を早くくれ～と毎朝ねだっています。左足がないために右足への負担が大きくなるため、現在は右足の腫瘍症の悪化を防ぐための治療をこまめに行っています。

## 腫瘍症

腫瘍症 (bumble foot) とは鳥類の足の裏にできる腫瘍のことをいいます (bumble: 台無しにする、よろめく、もたつく)。自然界に生息する猛禽類にはほとんど見られませんが、飼育下にいる個体 (特に猛禽類) ではこれはよく見られるものです。腫瘍症は足にかかる圧力や湿度、ストレス、鳥の体調、地面の質などに左右されます。一度腫瘍症になり細菌などの二次感染をすると治療が長引くことも



腫瘍症になったオオタカの足

あり、これはリハビリや放野の遅れにつながるため、ケージ内での安静時にいかに腫瘍症にさせずに健康を維持できるかも、救護において重要となってきます。

## こいつって外国産？国内産？

オオタカなどの猛禽類は江戸時代をピークに鷹狩りに使われてきました。今では日本に生息する野生鳥獣は原則捕獲禁止となっていて、オオタカも捕獲することはできません。しかし、インターネットが普及した今日において、輸入した猛禽類を購入することは誰でもできます。



保護された輸入シロオオタカ

今、この外国産の猛禽類と国内に生息する猛禽類の間で問題が起きています。その問題とは「交雑」、「DNA 汚染」です。

元々自然界に生息するオオタカは他の国のオオタカよりも少し小さく、亜種として分類されています。ですが、他の国のオオタカとは同じ種なので繁殖は可能で、ペットとして飼育されてきたオオタカなどの猛禽類が逃げ出し、同じ種で日本国内に生息する猛禽類と繁殖してしまうことがあります。それを「交雑」といい、段々と地域差がなくなってしまう、種多様性が失われていくことを「DNA 汚染」と呼びます。

この交雑の問題は猛禽類だけではなく。どの動物においても、飼育する際は絶対に逃げ出さないようにちゃんと飼いましょうね！！



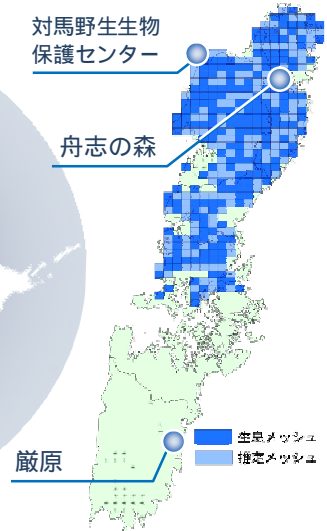
インタビュー：山本 英恵 先生



## No.1 ツシマヤマネコ



対馬



(対馬野生生物保護センター提供)

出張先の週末が大好きだ。ここだけの話、出張自体より力が入ったりして…。今回も、九州への出張を利用して対馬へ行ってきた。博多港からフェリーで5時間弱、到着した厳原(いづはら)は風情溢れる城下町。苔むした石垣が状態良く保存されている。

その厳原から車で約1時間半、上県町にある対馬野生生物保護センターを7月11日に訪れた。環境省によるツシマヤマネコの保護・調査機関に一般向けの広報を行う展示施設も兼ねている。

ここではツシマヤマネコの一般公開も行っており、私も運良くフクマ君に会えた。フクマ君は2004年に飼育下繁殖により福岡市動物園で誕生したイケメン男子。教育・広報のために活躍している。ツシマヤマネコはアジア大陸に広く分布するベンガルヤマネコの亜種で、日本では対馬にのみ生息する。日本版レッドデータブック IA 類の絶滅危惧種で、上県・上対馬町を中心に 80~110 頭しか残っていないそうだ。生息を脅かす原因は生息地

の減少、餌の減少、野猫からのネコ免疫不全ウイルス感染、トラバサミ(現在使用禁止)による錯誤捕獲、交通事故、など多くの理由が考えられている。

危機的状況を打破しようと立ち上がったのが、ツシマヤマネコを守る会、ツシマヤマネコ応援団、NPO 法人どうぶつたちの病院などの市民団体や環境省、長崎県、対馬市など行政機関のみなさま。始めは懐疑心を持っていたのに、今では率先して保護に取り組む住民もいるそうだ。やはり保護活動は地元の人ありき。

そんな地元の方々の方々の熱さを拝見できる場所へ案内していただいた。ツシマヤマネコ応援団による「とらやまの森再生プロジェクト」の舞台の一つ、上対馬町舟志(しゅうし)の森。ドングリの苗を植えれば、将来ツシマヤマネコの生息場所となり、さらにドングリを食べるネズミなど、ヤマネコの餌となる小動物が増えるかもしれない。そんな考えに基づき、放置されていた人工林を伐採し木を植えるなど、森の手入れをしている。



上対馬と下対馬の間にある中海には無数の島が浮かび、まるで宝石箱をひっくり返したよう



左は家猫、右がヤマネコ。耳の後ろが白く、しっぽは太くて長い。





舟志の森と、地元の方々お手製の作業小屋。写真右奥、ニョキニョキ立っている白いものはドングリの苗を守るカバー。とても素敵な雰囲気だ。

ツシヤママネコは里地・里山が意外と好きらしい。結局、地元の林業や農業の活性化がツシヤママネコの保全につながる。そして対馬の食物連鎖のトップに君臨しているツシヤママネコを保全することは、対馬の生態系全体を守ることに繋がる。舟志の森の土地は、そんな考えに共感した企業から無償で提供されている。

こうした活動の一つのきっかけが 2006 年に実行された「ツシヤママネコ保全計画づくり国際ワークショップ」。IUCN 種の保存委員会から 5 名の専門家が招待され、日本のヤマネコに関連する研究者や対馬市民と合わせて約 200 名が一同に会してヤマネコを守る作戦が練られた。ちなみに、ワークショップで行われたコンピューターシミュレーションによると、このままの状態が続いた場合、今後 100 年後の絶滅可能性は 50% 近くだったそうだ。ワークショップのレポートは CBSG ウェブサイトでダウンロード自由。日本語版しかないのが世界の人に読んでもらえないのが残念だが、非常に充実した内容だ。(正直、充実しすぎていて読み切れなかったワタシ...)



ツシヤママネコグッズの一部。右が@zuki さんの箸袋。

このような国際的な場でどんどん発表して行くのは、海外の英知も借りることができ、非常に有意義なことだろう。当会もいつの日か...?!

余談だが、センターにあるツシヤママネコグッズ、かなりカワイイ。後日、アート系のイベントでこの「マイ箸」セットの製作者である@zuki(アズキ)さんに偶然お会いした。猫の形をした箸袋にヤマネコ保護の関係者が目を付け、ツシヤママネコ版を作ってもらう様に持ちかけたそうだ。

目利きのグッズ企画者など、多様な人が集まってこそ生物の多様性も守ることができるのかもしれない。

活動についてのお問い合わせはこちら  
環境省 対馬野生生物保護センター  
e-mail: twcc97@yahoo.co.jp / tel: 0920-84-5577

#### 参考文献

1. 改訂版 ツシヤママネコ(著者:ツシヤママネコBOOK 編集委員会、発行:長崎新聞社、2008)
2. ツシヤママネコ保全計画づくり国際ワークショップ(CBSG ウェブサイトより)  
[http://www.cbsg.org/cbsg/workshopreports/23/tsushima\\_leopard\\_cat\\_phva.pdf](http://www.cbsg.org/cbsg/workshopreports/23/tsushima_leopard_cat_phva.pdf)

これであなたもバイオリンガル!?  
(生態系に関するワンポイント英語レッスン♪)

今日のことは: **biodiversity** (生物多様性)

Biology(生物学)などの“bio”と、「多様性」という意味の“diversity”をくっつけた造語です。  
(そのまんまじゃん!)

用例: **Biodiversity**, as the backbone of all life on Earth and the core of what IUCN does, is also the basis for our four other areas of work: climate change, energy, livelihoods and economics. (IUCN [International Union for Conservation of Nature]ホームページより)

訳例: 地球上の全生命の源であり IUCN の活動の中心でもある生物多様性はほかにも IUCN における 4 つの分野の基礎をなしています。気候変動、エネルギー、職業、そして経済です。

こんな感じで発音してね

バイオダイヴァースィティ



## パネル展示「人間社会のかけで、傷つけられている野生動物たち」

●私たちの身近にいる野生動物たち。保護される野生動物たちのほとんどが、人間のせいで傷ついています。その数ある事例から一部を紹介いたします。

▽日時 2月～4月

▽場所 自然環境保全センター新館二階  
展示ギャラリー



## 「海ゴミ GO ME!」展

●釣り針、釣り糸、プラスチック片などの”海ゴミ”。そのせいで野生動物たちが傷ついている現実を紹介いたします。様々な場所で開催しましたが、ズーラシアに再登場！

▽日時 2月(予定)

▽場所 よこはま動物園ズーラシア

今後の参考にしたいと思  
いますので、同封のアンケ  
ートにご協力をお願いします。  
RUNNER に関する率直な  
ご意見・ご感想をお書きくだ  
さい。

## ★★会員へのお誘い★★

当会は、ボランティアスタッフの協力と設営趣旨にご賛同いただきました皆様方の寄付によって運営されております。

私たちの活動を支えてくださる賛助会員も同時に募集しています。

★ボランティア会員(年会費2,000円)

一般会員:どなたでもご参加いただけます

救護会員:ボランティア講習会を受講し、野生動物救護ボランティアとして登録された方

★学生会員:学生の方(年会費1,000円) <区分は上記と同じ>

★賛助会員:当会の活動にご賛同いただき寄付をしていただいた方

年会費:法人一口5,000円 個人一口3,000円 一口以上

振込先 ゆうちょ銀行振り替え口座 : 00270-0-47040

名義 : 特定非営利活動法人 野生動物救護の会

発行月:2009年12月 発行:特定非営利活動法人 野生動物救護の会 電話:0463-75-1830

〒259-1306 神奈川県秦野市戸川1086番地の4 ホームページ: <http://kanagawa-choju.sakura.ne.jp/>

編集者 表紙絵、ツシマヤマネコ:武田智子 新人ボランティア:太向咲恵 今日のRUNNER、樹洞:小松美絵

アメリカ、ランナー通りの住人たち:高橋恵 動物フェスティバル・環境フェア:本田由美

バードフェスティバル:山下宏幸 ボランティア雑感:塩崎麻由

写真提供 佐藤信敏、神崎さつき

Special thanks 加藤千晴先生、渡辺さん、三輪さん、平沼さん、平さん、ご協力いただいた方々ありがとうございました☆

